

文学の過去と現在 (二)

——スタール夫人

1

『フランス革命の文学』の冒頭部でベアトリス・デイデイエは、一七八九年から九九九年にかけての文学活動が提起する問題の特徴を、次のように説明している。「時間がたつても論争は尽きず、この時期の研究が、ほかの時代と同じように冷静な見地からすすめられることはなかった。この時期の文学が本質的に政治に巻き込まれていくため、批評する側の政治的な立場選択を促すのである。それはまた、さまざまな問題を課する。本質的には二つの問題に帰着するが、そのあいだにこの時期の文学全体が立脚している。すなわち、フランス革命とは何か、そして、文学とは何か^①」あまりにも根本的でしたがつてあまりにも漠然としたこの二つの問いかけは、革命期の作品を読むわれわれがたえず念頭に置くべき問題であるとともに、この時代を生きた作家たち自身に突きつけられた問題でもあったように思われる。彼らの考察が、革命と文学という二つの方向に分岐するのは、必然の流れであつただろう。文学の創造という孤独な行

為よりも革命という社会の状況の重みが増せば、文学の自律性は否応なく減退する。もちろん、フランス革命以前にも、フランスの文学は社会と密接にかかわってきた。ただしアンシアン・レジーム期には、文学とその外部とは、少なくとも安定した関係にあつたはずである。フランス革命は、文学が社会において生産され、受容される秩序を一挙に崩壊させた。その結果この時期の作家たちは、文学に関する意識と方法を修正するよう強いられる。

このような混乱状態のなかで書かれた作品群のなかに、次世代に強い影響を及ぼすような、いわゆる傑作は見当たらない。ギユスターヴ・ランソンは、フランス革命が「まず第一に、文学をかつてないほど墮落させた^②」と断じている。同じようにほとんどの文学史が、この時期の文学活動を軽視しているといつていいだろう。フランス革命期の文学は、先行する啓蒙主義と、後に続くロマン主義のあいだにはさまれ、誇るに足る独自性に欠けており、存在感に乏しい。そこに主として探し求められるのは、より重要だと判断される、

泉 利明

作品の外にあるものとの相対的な関連である。一方では、啓蒙思想がフランス革命期にどのような影響を与えたか、あるいはロマン主義がこの時期にどう芽生えていたかが検討の対象となるだろう。もう一方にあるのは、フランス革命という事件とその社会が、同時代の文学作品にどう描かれ、何が書き込まれているかという、証言としての関心である。

われわれは、彼らを取り巻いていた環境の重要性ゆえに、彼らを、社会という外部に身をさらし、その影響をじかに受けた受動的な存在とみなしがちである。しかし、作品として結実したものの価値とは無関係に、彼らは、みずから主体となつて状況に対処し、革命の意味を考察し、かつまた、新しい文学の形を模索した作家であつたはずである。そして、進行中の事態として革命に関わる彼らには、革命および社会についての考察と文学とを切り離すことはできなかっただろう。逆に見れば、性質の違いを超えて、この二つを相互的に関係させる思考様式が、フランス革命期の作家を特徴づけているように思われる。バルザックの時代になると、論点が整理され、分析的になりすぎってしまうのである。

スタール夫人は、フランス革命とは何か、そして文学とは何かという二つの問題に、それぞれ真正面から取り組んだ作家である。父親にネットワークをもち、ナポレオンと確執を演じた彼女は、自伝的な意味でフランス革命の目撃者であり、当事者でもあるが、フランス革命を、「人類を揺るがした最も大きな事件³⁾」と位置づけ、その原因、経過、意味について問いかけた数冊の著作を残している。もう

一方で彼女は、小説を書き、文学の理論的な側面についても考察した。ただ、スタール夫人において革命と文学が結びついているのは、彼女が『コリヌヌ』と『フランス革命についての考察』の著者であるからというだけではない。それよりもむしろ、彼女にあつては、革命を経験しその意味を問うことが、同時に文学の見方に強く働きかけており、また過去の文学の歴史と役割を明らかにすることが、革命の意味を照らし出すことにつながるとみなしているからである。文学が含みもつ概念と、革命のおよぶ射程が、ともに拡大され、同質的な問題として重なり合っている。

一八〇〇年に発表された『社会制度との関連において考察された文学について』(以下、『文学論』と表記する)は、その表題がはつきりと示しているように、ホメロスの時代からフランス革命にまでいたる長い時間のなかでの社会と文学の関係そのものを主題としている。そしてスタール夫人は、このような考察方法を独創的なものと自負していた。文学それ自体についての理論をめぐっては、すでに「ヴォルテール、マルモンテル、ラ・アルプ⁴⁾」が、『趣味の神殿』(一七三三年)、『文学原理』(一七八七年)、『古代・近代文学講義』(一七九九年)などの優れた著作を残している。「私が示したかったのは、各世紀、各地域での文学と社会制度のあいだにある関係であり、この作業は、これまでに存在したいかなる書物においてもなされていない⁵⁾」スタール夫人と同時代人を生きたボナルドも、文学を「社会の表現」と呼んだ。しかし彼女にとって、文学と社会の関係は、相互的、双方向的なものである。「宗教、風俗、法律⁶⁾」が、

文学に影響を与えるだけでなく、それらが文学から影響を受ける。人間の能力が文学作品の受容によって発達する一方で、道徳や政治が文学のあり方を変えてしまう。

われわれの関心は、スタール夫人が文学について具体的に何を述べ、個々の作家、個々の作品についてどう評価したかということよりも、文学と社会をからませながらどのように思考しているかという、彼女の発想のあり方である。ただこれでもなお、問題設定としては漠然としすぎているだろう。本論で特に焦点を当ててみたいのは、文学と社会の提起する問題が、時間の流れという意識とどう交差されて論じられているか、という点である。文学と社会は、ある時代という一点を対象とすることもできれば、長い歴史をもつものとして検討することもできるし、また、理想の文学、理想の社会という観点からすれば、無時間的にとらえられるだろう。細かくみれば、スタール夫人の考え方は、理論的な著作だけをとってみても、『革命を終結させる現在の情勢と共和政を基礎づけるべき諸原則について』から『文学論』を経て、『ドイツ論』にいたる過程で、いくらか変化している。しかし、このようなテーマに関しては、「古代人と近代人の文学について」と「フランスにおける啓蒙の現状およびその将来の進歩について」の二部より構成されている『文学論』を中心におくのが、一番ふさわしいだろう。この作品は一見したところ、文学の歴史を時代順にたどって書かれているが、時代を一つ一つ切り取って、そこに認められる文学と社会の結びつきを論じているだけではない。異なる時代もまた相互に結びつけられ、

さらにそこに、スタール夫人の発話の現在が覆いかぶさっているのである。

2

スタール夫人を「『啓蒙』の精神の最も忠実で、最も聡明な後継者」と呼ぶロラン・モルティエをはじめとして、彼女が十八世紀に何を負っているかを論じる研究者は少なくない。母親のサロンでデイドロ、ダランベール、ビュフォン、マルモンテル、エルヴェシウスといった多くの著述家たちと交流した彼女は、書物と人間の双方からその影響を受けたはずである。ところで一七六六年生まれの彼女にとって、これらの人物とつきあい、その精神を受けつぐというのは、後世から見れば、古びつつあるものと触れ、程なくして消えうせるであろうものと親しむことでもあった。すでに一八三五年にサント・ブーヴはこう記す。「スタール夫人はごく若い頃、教育上の配慮から、かつての世界のサロンに加わっていた。彼女の成長を見守り、その早熟な才能の開花を喜んでいたのは、いずれも、過去の最後の時期においてもっとも精神的な集まりを構成している人物たちであった。」^⑤スタール夫人には新鮮であったはずの存在が、サント・ブーヴには古いものに映るのは、彼らの世代のずれだけによるのではない。その中間にあるフランス革命という溝が、距離をいつそう大きく見せてしまうのである。

スタール夫人は、このサロンを通して啓蒙の精神と社交の場をもに体験した。しかし新しい時代になると、彼女は、過渡期特有の

二重性を帯びることになるだろう。ジャン・クロード・バレールは、彼女のもつ両面性をこんな風に説明する。「彼女は二つに分裂している。一方には、共和主義的思想とそれに結びついた徳、平等、自由への信仰があり、他方には、アンシアン・レジームの社会における芸術の趣味と振舞いの礼儀正しさを尊重し、懐かしく思う気持ちを生み出した個人的な人格形成がある。」⁹⁾ただ、このような二重性を分裂と見るか、あるいは同時的共存とみなすかで、スタール夫人の思想の全体像は、大きく変わってくるのではないだろうか。彼女にそなわった特徴を整理分類するだけなら、バレールの指摘どおりである。しかし『文学論』を書く上で、彼女がまず解決しなければならなかったのは、現在と過去、新しさと古さをどう関係づけるかという問題ではなかっただろうか。「現在」にもいろいろ側面があり、「過去」はいくつもの層から成り立っている。現在が新しく過去が古いという、単純な関係にはない。この相互的な結びつきを探ろうとすることが、ときに『文学論』の叙述を混乱させるような印象を与えるが、彼女の歴史と文学への視線を豊かにしているように思われる。

スタール夫人にとっての古さと新しさという問題を読み解く一つの糸口として、何よりもまず取り上げねばならないのは、「完成可能性」*perfectibilité*という考え方である。人間の精神は完成に向かつてたえまなく進歩する。「世界の変動と諸世紀の推移をたどりながら、私が決してそこから注意をそらさなかった、一つの根本的な観念がある。それは、人類の完成可能性である。輝かしい時代で

も、闇の世紀であっても、人間精神の漸進的進行は、一度も中断されたことがなかった。¹⁰⁾十八世紀中頃に生まれたこの単語をヨーロッパ中に広めたのは、ルソーの『人間不平等起源論』だとされ、世紀末には、コンドルセの『人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描』における中心概念となる。¹¹⁾そしてスタール夫人は、『文学論』という著作が、人間の完成への歩みを文学の歴史に適用してその流れを論じるという、これまでにない試みだと考えていた。文学をこのように人間精神と直結させて見ることが可能なのは、文学という言葉が、虚構の作品という範疇をはるかに超えて、「詩、雄弁、歴史、あるいは精神的な意味での人間についての研究」を含む、包括的、総合的な観念とみなされているからである。別の定義によれば、文学とは、「哲学的著作、想像力による作品、要するに、自然科学を除いて、書物における思考の行使にかかわるすべてのもの」¹²⁾を指す。

スタール夫人は、それぞれの時代ごとの思考の相違を丹念に拾いあげ、そこに「時間の経過という単純な効果」¹³⁾を探りあてながら、進歩を立証しようとする。その進歩は、古代と近代という大きな枠組みにおいて認められるだけでなく、少しでも遅く生まれたほうが卓越している。古代ローマは古代ギリシアより優れている。同じ古代ギリシアでも、アリストファネスに比べれば、一世紀あとという利点によって、メナンドロスの方がより演劇的な品位があり、テオフィラストスの方が人間の心の観察において進歩している。¹⁴⁾また、人類が完成をめざして間断なく進むのであれば、中世を暗黒の時代とする歴史観も否定されねばならない。スタール夫人は、ローマ帝

国崩壊からルネサンスまでのおよそ十世紀のあいだに、キリスト教がヨーロッパに根づき、北方民族と南方民族が融合したおかげで、「知識の普及と、知的能力の発展にとつて、はかりしれない前進があった¹⁶⁾」と考える。

完成可能性という概念は、多くの批判も受けていることを、スタール夫人は『文学論』のなかで認めている。またこの著作が、完成可能性を前面に押し出しているために非難され、論争を巻き起こすことにもなるだろう。ただ、この観念が『文学論』の叙述を導く基本理念であるとしても、スタール夫人はそれを頑迷に、あらゆる部分にあてはめて主張しているわけではない。何が、どのように進歩しているかについて、いくつも制限が加えられているのである。

たとえば、完成可能性を肯定することは、過去の偉大な作家たちの軽視につながるだろう。この批判をかわすために、スタール夫人は第二版の序文で進歩のあり方をこう限定する。「人間精神の完成可能性について述べるとき、私は、近代人が古代人よりも大きな精神的能力をもっていると主張しているのではない。私がいいたいのは、いかなるジャンルであれ、思想の集積が世紀の移りかわりとともに増加しているということだけである。」¹⁷⁾鎖をつなぐように、新しい世代は前の世代が到達した地点から出発し、そこに何かを付加してゆく。古代人と近代人の違いは、質の差ではなく量の差としてとらえられている。両者のあいだに認められるのは、言葉で説明したい絶対的な差ではなく、測定可能な相対的な差だともいえるだろう。

このように見ることによつて、図式としての明快さはいくらか増すのかもしれない。しかしそれでもなお、古代ギリシアからの長い文学の歴史にそのままあてはめ、作品の価値を裁断するには、あまりに粗雑な見方であろう。そもそも、文学の歴史を足し算的な発展で片づけてしまうことほど、無味乾燥な見方があるまい。文学の対象を押しひろげ、さまざまな時代、さまざまな場所の作品を取りあげることによつて、逆に、段階的かつ直線的な進歩という理念と齟齬をきたす部分にもぶつかってしまう。そして逆説的な言い方をすれば、スタール夫人が困惑し、言い淀み、苦し紛れに別の論理を持ちだしてくるところに、文学と歴史の揺るぎない実質が露呈しているようにも感じられるのである。

何よりもまず、文学の歴史の発端にホメロスがいたという事実は、文学の進歩という考え方に対するこの上なく強力な反証となる。スタール夫人はこの矛盾を回避するために、文学を、思想、理性、哲学にかかわる部分と、想像力や詩的表現と結びつく部分に区別する。「完成可能性の体系を、思想の進歩にのみ適用し、想像力による傑作に適用しなければ¹⁸⁾」、古代ギリシアの詩人を後世が乗り越えられなかった、したがって、文学は進歩していないという反論を、とりあえずは無視できるだろう。思想は持続的に発展し、その終着点は予想しえないのに対し、想像力による文学的創造では、無限の進歩はありえない。学問では知識は積みかさなり、最新の段階が一番優れているが、詩においては、最初の表現が最も強い印象を与える。このような文学の二重性は、進歩を質的ではなく数量的のみにと

らえるという発想と重なりあっている。

ただ、想像力を土台とする著作は進歩しないとしても、『文学論』の記述からこの種の文学にかかわる部分が除外されているわけではない。想像力による作品と哲学的な作品が相俟って文学を構成しているのである。スタール夫人は、文学の直線的な進歩をたどりつつ、その図式にそぐわない著作についても言及する。このことは、文学の完成可能性という主張の脆さであり、不徹底さにもみえるが、それとともに、想像力に基づく作品を論じることで、理性による作品の特徴と役割が、対比的に照らし出されるだろう。

文学の歴史の解釈において、この二つの区別はほかの要素にも波及してゆく。たとえば、作品が出現する順序と結びつけられる。それぞれの時代には固有の文学が生み出されるが、「すべての言語において¹⁹⁾、まず先行して作られるのは詩的作品である。しかし時代が経つにつれ、その表現の新鮮さは褪せてくるだろう。そうなるは今度は、理性による著作が求められるようになる。このような前後関係は、詩という二次的なジャンルがより重要な哲学的作品によって乗り越えられるという、優劣の差として理解すべきではない。スタール夫人は、この二つを対比させながら、比較級と最上級を巧みに使い分ける。時間とともに知識は増加し、思想は積み重なってゆくが、天才の想像力はけっして凌駕できない。「ラシーヌのあとに、われわれはヴォルテールが現れるのを見た。なぜなら十八世紀は十七世紀よりも思索的だからである。しかし、ラシーヌのあと、詩の完璧さにいったい何を付けくわえることができただろうか。」²⁰⁾ヴォ

ルテールのな道は、さらなる発展が可能である。しかし、ラシーヌ的な美は、絶対に再現できない。

想像力Ⅱ詩と理性Ⅱ哲学という二分法を設定することによって、スタール夫人は、過去からの継続と過去との隔たりを、同時に示しているといえるだろう。過去における想像力の傑作と現在との関係について、彼女は次のように説明している。「趣味と簡素な様式を深く理解するには、古代の模範を研究しなければならない。しかしそれは、古代人の思想と空想を、現代の作品にたえまなく取りいれるためではない。そのような過去の記憶と混ざりあった創意は、その記憶とちぐはぐになってしまふのがほとんどである。古代人の著作の研究をどれほど完全に行なつたとしても、彼らの真似はできるかもしれないが、彼らの流儀で彼らと同じように創造するのは不可能である。古代人と肩を並べるには、彼らの跡を懸命に追っていつてはならない。彼らは彼らの畑で収穫を得た。われわれはわれわれの畑を開墾すべきだろう。」²¹⁾哲学の領域では、時間とともに新しいものが追加されるのであるから、過去の模倣はそもそも問題にならない。想像力の文学においても、模倣の意味は、趣味の良さや文体の純粹さといった限定的なものにとどまるだろう。

ところで、右の引用文でスタール夫人は、古代人と現代人の異質性を強調するとともに、現在において古代人に匹敵する作品を創造することを待望している。それと同じように、『文学論』では、「彼ら」と「われわれ」のあいだにある距離を示す一方で、両者の類似性もまた、しばしば指摘されている。先述したように、まず想像力

の作品があり、次に哲学的作品が書かれるという順番は、反復して現われる。また、ゲルマン民族が移動してきた時期は、フランス革命期と似ているともいう。このような点も、直線的な進歩という構図にはそぐわないだろう。『ドイツ論』でスタール夫人は、ゲーテの言葉に触発され、人間の精神が直線的ではなく螺旋状に進むというイメージを提示する。「多くの時代に人間精神は後退し、そのうち、少し程度を上げたあとで、また元きた道を引きかえすのであるから、このたとえの方が正鵠を射ている。」⁽²²⁾螺旋状というのも、一つの図式でしかない。しかし『文学論』の文脈でも、新しい段階への進歩と類似した現象の回帰を同時に表現しようという意味で、よりスタール夫人の考えにふさわしいとはいえるだろう。では、時間の流れの最終段階にあるフランス革命は、この螺旋のなかで、どのような位置を占めているのだろうか。

3

一七九二年にコンドルセは、「公教育の全般的組織についての報告」のなかで、ラテン語習得の有効性を否定し、この言語で書かれた作品の抹殺を主張する。「われわれが教育に求めているのは真理を認識させることだが、これらの著作は誤謬に満ちている。われわれは理性を育てようとしているのに、これらの書物は理性をかき乱す。」⁽²³⁾フランス革命が目指そうとしたのが、伝統との断絶によって新たに社会を構築することであるとすれば、その理念を書物にあてはめれば、当然このような主張が生まれてくるだろう。しかし

スタール夫人は、コンドルセから多大な影響を受けているものの、過去の著作に対するこういった過激な、一面的ともいえる見方を共有していない。すでに見たように、スタール夫人にとって古い作品の価値は、少なくとも想像力に基づく作品では否定しようがないし、哲学的著作についても、過去の蓄積として必要となるのである。

もう一方でスタール夫人は、フランス革命そのものを否定する。この進行中の状態は、進歩の最終的な帰結であるどころか、人類の完成可能性を根底から覆す事態にはかならない。たしかに当初は、フランス革命は「知的世界にとつて新しい時代」⁽²⁴⁾を告げるようにも思われた。しかし、革命が進行するにつれ暴力や犯罪が増加し、かつての美德が嘲弄され、理性によって真実を探求する意思が失われたことに、スタール夫人は失望し、強く反発する。先に触れた、時間の螺旋状の進展において、フランス革命は後退の時期にあたる。

『文学論』には、十七世紀からの新旧論争でなされてきた議論の焼き直しのような見方がいくつも含まれているのはたしかである。しかしフランス革命という体験は、これまでの新旧の比較を部分的にであれ屈折させるだろう。『文学論』の特に第二部は、革命による停滞および逆行という状態から脱却し、その後の新たな発展の可能性を示唆しようとする試みでもある。

スタール夫人がフランス革命を強く否定する大きな要因は、この変動によって過去と現在の相互的な関係が崩壊したことにある。進歩の肯定は、そのまま過去の否定となるのではない。彼女は過去への関心が、進歩を可能とする条件と考える。『亡命の十年』では、

ナポレオンがこう批判されている。「歴史の尊重は、世界を自分の同時代のものとしてしか捉えなかつたこの男には、無縁であつた。」⁽²⁵⁾このことは、ナポレオンに限らず、フランス革命以後に顕著となつた一般的な傾向として彼女には映つていたはずである。では、なぜ過去に眼を向けなければならないのか。まず第一に、過去から現在へといたる連鎖の因果関係を知ることが、よりよい未来の創造には不可欠だからである。それとともに、理想となるものがすでに過去に存在している場合もある。『フランス革命についての考察』では、「古いのは自由であり、専制政治が現代のものなのだ」と述べられている。一度とだえた価値を復活させるという伝統への回帰は、また進歩とも合致しうるのである。

文学の問題に限定してみれば、社会のあり方以上に、過去と現在がさらに密接にからみあつてゐる。過去の文学の分析は、未来の文学の予測につながつてくるだろう。新しく生まれるべき理想の文学は、過去の著作の本質的な美点を再生させ、かつての欠陥を除去したものと説明される。そうした理想や価値を表す概念として、『文学論』でくりかえし用いられているのは、「趣味」という語である。スタール夫人にとって「よい趣味」とは、古典古代やルイ十四世の時代に規範を仰ぐような、ある特定の時代に固有の価値ではない。趣味は理性と結びついており、したがつて、時代や場所の差を超越した普遍性をそなえている。よい趣味を尊重することと、北方文学のもつ美や崇高さを南方文学に導入することは、矛盾しない。その一方でスタール夫人は、趣味のよさにそぐわないとして、アン

シアン・レジムとフランス革命を、ともに切つて捨てる。「アンシアン・レジム期の社交界がもつていた気取り、揶揄、要求に對して非難しうる欠点の特徴を明確に示すことは、有益だろう。そうすれば次に、革命のある時期に導入されようとした、際限のない大胆さや、優雅を欠いた陽気さ、品位を落とす粗野が、文学と政治にもたらす唾棄すべき影響を、よりはっきりと示すことができるだろう。」⁽²⁷⁾

こうした悪しき先例の欠点をあげつらえてゆけば、消去法によつて、來たるべき時代の文学の輪郭が浮かび上がってくる。気取りと下品を回避して生まれる文学は、高貴で、簡素で、自然だという特徴を帯びるだろう。そして、アンシアン・レジムとフランス革命それぞれの特徴の中間を縫つて進むとする態度は、極端なもの、度を過ごすことを忌み嫌う心理と分かちがたく結びついている。スタール夫人はこうもいつてゐる。「しばらくのあいだフランスでは、文学においても革命をおこし、いかなるジャンルであれ、趣味の規則に最大限の自由を与えるべきだと考える人々がいた。しかし、文学の進歩にこれほど反することはない。」⁽²⁸⁾彼女が抱いてゐるこのよくな見方は、いつてみれば、ラジカルさを欠いた穩健なものである。しかしその穩健さは、当たり障りが無いという意味ではない。スタール夫人は、一方では進歩と自由を声高に主張し、他方では激変と放恣の弊害を説く。理想を根強く求めながら、それがあつてもない夢物語に墮することを警戒する。彼女の文学観は、そうした狭い、限られた場所に位置づけられるだろう。

では、フランス革命という、理性にとつての異常事態を、どうやって正道に戻せばいいのか。スタール夫人はいう。「啓蒙による悪は、さらに多くの知識と知性を獲得することによってしか、矯正できない。」啓蒙の不十分さが逸脱を招いたのであり、したがって、数量の不足を補わねばならない。十八世紀に生まれた新しい哲学を、さらに広く深く適用していくことが、最も有効な解決策となるだろう。この点でスタール夫人は、まぎれもない啓蒙思想家である。文学もまた、啓蒙に資するのだから、社会の変化を引きおこす媒体としての側面をもつ。「優れた文学に属する著作は、有益な変化をもたらす、必要となる進歩を速め、最後に、制度と法律を改良することを目的としている。」ただしこの主張は、彼女が社会を第一義において、文学をそれに従属するものとみなしていたという意味に取るべきではない。強調されているのは、このような変化を引き起こす力をそなえている文学の有効性と可能性である。

文学がこうした力を得るにいたつたのは、文学者の境遇の変化と文学の目的の変質という、歴史的な要因によるものとスタール夫人は考える。十七世紀の作家たちは、国王の庇護を受けていた。それはすなわち、作家よりも国王の方が上位にあるということであり、作家は、みずから置かれた社会状況をそのまま認するしかない。「ルイ十四世の世紀の文学は、想像力による傑作である。しかしそれは、まだ哲学的な力とはなっていなかった。というのは、絶対君主が文学を奨励しており、文学は彼の専制政治にまったく不安の念を抱かせなかったからである。精神の楽しみ以外の目的を持たない

この文学は、とうとう王座をぐらつかせてしまった文学のエネルギーをもちえない。」また、結局は同じことをいつているのだが、このような変化を十八世紀の方から、作家よりも作品に即してみれば、次のように説明される。「ルイ十四世の時代には、書く技術そのものの完璧さが、作家の主たる目的であった。しかし十八世紀になると、文学はすでに異なった性格をもつようになる。それは、単なる技術ではなく、一つの手段である。以前は人間精神を教化し、楽しませることで満足していた文学は、人間の精神にとって、一つの武器となる。」

ただ、十七世紀から十八世紀への文学の推移は、想像力の文学から哲学的著作への移行に対応しているが、それはルイ十四世の世紀の文学が、そのまま新しい文学に置き換わつたということではない。全体の刷新ではなく、過去の文学の本質的な部分を維持しつつ、新しい力がそこに付けくわつたという変化として理解すべきだろう。スタール夫人の用いる「哲学」という語は、それだけの幅をもっており、また彼女のいう文学とは、想像力によるものと理性によるものを同時に包含しているのである。

スタール夫人にとつての文学とは、「思考」と「言葉」を統合したものであつたといつてもいい。文学の進歩とは、「すなわち考えの技術と表現する技術の完成」にはかならない。したがって、『文学論』において「雄弁」がくりかえし考察の対象となり、それに関連して政治が問題となるのは当然である。この書物で論じられているのは、理性と想像力と雄弁を媒介とする言語使用の歴史とその

特徴であるともいえるだろう。スタール夫人はこう述べる。「論理的思考と雄弁は、共和国を結びつける自然の絆である。魂に入りこみ、表現しているものを心に吹きこむ言葉ランガージュの力と真実をあなたがもっていないとすれば、人間の自由な意思に対して、いったいあなたに何ができるだろうか。」⁽³⁴⁾

このように、文学は他者の精神に働きかけてその魂を揺り動かし、集団的な意見を形成して、理想の共同体を築きあげる原動力となるだろう。ただし、この願望が成就するためには、十七世紀から十八世紀へと時代が進むだけではなく、十八世紀においても一つの変化が生じねばならなかった。啓蒙する段階から、変化を起こす段階へと進まねばならなかったのである。スタール夫人はこの発展を、ヴォルテールとルソーの名をあげて説明する。ヴォルテールは、「知性が上品になり、哲学が流行することを望んだ。しかし彼は、自然の強い感覚を呼びおこすことはまっただけでなかった。彼はルソーのように、森の奥底から原初の情念の嵐を巻きおこし、政府をその古い土台から揺さぶろうとはしなかった。」⁽³⁵⁾根本的な変化を生じさせるには、知識だけではなく、自然と感情の結びつきが不可欠なのである。

ここから、ロマン主義者としてのスタール夫人が現れる。そして、ルソーとつながる「自然」および「感情」という言葉は、スタール夫人が文学の歴史を見る上でも、大きな役割を果たしている。まず、文学作品のなかで、感情についての深い知識を示し、情念を力強く表現するようになったことが、古代に対する近代の決定的な優越を

示す特徴であることは、何度となく強調されている。そして、モリストたちによる心理分析をさらに超えて、ルソーとベルナルダン・ド・サン＝ピエールは、「自然が人間に抱かせる感情と結びついた自然の観察」⁽³⁶⁾という新しい種類の詩を、散文作品において生み出した。

ところで、その一方では、過去において最も自然を重視したのは、古代ギリシア人だとされている。文学の出発点にあり、模倣する相手をもたなかった彼らは、先行者を意識してあれこれ工夫する必要がなかった。「ギリシア人たちは、自然だけを模範とし、時には粗野になりもしたが、わざとらしくなることは決してなかった。(…)彼らは、真の道を進んでいたのだ。」⁽³⁷⁾だとすればこの点でも、人間精神の進歩という図式との矛盾があるといえるのかもしれない。しかし、ギリシア人の欠点は、自然しかもたなかったということにあるだろう。スタール夫人にとっての進歩とは、価値のないものを削り落とし、価値のあるものを累積させることによって達成される。ルソーとともに表現されるようになった自然と感情の結合は、それじたいが独立して新しい美を作りだしているのではなく、以前よりある想像力、理性、哲学と融合していることが、前提として言外にある。

たとえばスタール夫人は、こんな説明の仕方をする。「自然の驚異を遠ざけてしまえば、自然においてはすべてが結びついている。そして書物は、自然の調和と統一を模倣しなければならぬ。哲学は、思想をさらに普及させながら、詩的なイメージをいっそう偉大

なものにする。論理についての知識によって、情念について語るこ
とがより可能となる。思想におけるたえまない前進と、有用性とい
う目的は、すべての想像力による作品において感じ取られねばなら
ない。⁽³⁸⁾「このような文章が、さまざまな要素——自然、哲学、思想、
詩、情念、有用性、想像力——を十分整理しないまま雑然と詰め込
んだような印象を与えることは否めない。観念的にすぎるとい
判もできるだろう。ただ、ここに読みとらねばならないのは、こ
うした文章の積み重ねによって統合されている、スタール夫人の文学
観の多層性であり、それぞれの要素の相互的な連関の重視である。
文学の歴史を論じるために『文学論』で用いられている視点は、こ
の一節にほぼ出尽くしており、それらが一つに統合された果てに、
次の時代の文学が生まれるだろう。あと残されているのは、スター
ル夫人の自我の問題であり、「過去」が文学にもたらす作用である。

4

スタール夫人にとっての完成可能性とは、「すべての階級、すべ
ての国における文明のたえざる進歩⁽³⁹⁾」と結びついていた。彼女はま
た、こうもいつている。「歴史を研究していると、主要な出来事は
すべて、普遍的な文明化 *civilisation universelle* という、同一の目的
に向かっているという確信を得られるように思われる。」⁽⁴⁰⁾ たしかに、
文明化という理想は肯定されている。しかしこの主張もまた、哲学
の側面が強調されたものにすぎない。文明化とは、歴史の流れを俯
瞰的に分析して得られる観念である。『文学論』が具体的に語って

いるのは、個々の文化、個々の民族が何を、どのように問題として
提出したかであり、世界の全体を、高い次元で同質化することだけ
が目的となっていたのではない。少なくともまず前提となるのが個
の存在であり、そこから全体が形成される。そして個は、全体のな
かに埋没して消失してしまうのではなく、個と全体、独自のものと
普遍的なものが、融合しつつ均衡を保っているのである。

文化という観点からみた個と全体の均衡のあり方を、ピエール・
マシュレーは次のように説明している。「スタール夫人の場合、彼
女と比較したくなるドイツの著作家と違って、厳密な意味での国民
文化理論というものはない。(…)彼女の関心をひきつけたのは、
さまざまな文化のあいだに成立しうるコミュニケーションの問題で
あり、それ自体として考察された文化(…)の同一性の問題ではな
かった。(…)このようにしてスタール夫人は、諸文化の差異と対
立を維持しつつ諸文化を統合する複雑な関係システムの内部にしか
文化的同一性は存在しえない、という独創的な命題を主張するにい
たったのである。」⁽⁴¹⁾ ここで指摘されている事柄は、フランス、ドイ
ツ、イタリア、イギリスといった空間的、地理的な意味での文化に
のみ当てはまるのではない。とりわけ『文学論』に即してみれば、
一つ一つの章を構成する個々の時代、個々の社会の文学もまた、時
間の流れのなかで、模倣、影響、反発等をとおして「コミュニケー
ション」を実践しつつ、全体を構成しているといえるだろう。この
著作が一面では文学史であり、かつまた比較文学でもあるのは、こ
のような文学の個と全体の関連に対するスタール夫人の視線が、時

間的な差にも空間的な差にも自在に向けられていることの結果にすぎない。

全体と均衡を保っているのは、個々の社会、個々の時代だけではない。人間一人一人もまた、全体に属しつつ、個を主張する。そうした独自のものの必要性を、最も明瞭に表現しているのは、『コリンヌ』での女主人公の台詞である。「世界全体にとって、国の特色や、感情と精神の独自性をすべて失うことが望ましいなどは、私にはとても思えません。(…)天才とは、本質的に創造するものがあり、天才をそなえた個人の性格を含みもっています。自然は、どの二枚の葉っぱも似通っていることを望みませんでした。そして自然は人間の魂に、さらに多くの多様性を与えたのです。模倣は死のようなものです。なぜならそれは、一人一人から、その本来の存在^{ナチュレ}を奪いとってしまうのですから。」

一方で人間は、知識を蓄積することによって均質化しながら進歩する。しかしもう一方で、個人の才能と感情が、人間を個別化する。先に触れたように、スタール夫人は感情の重視を、古代に対する近代の優越の証しと考えていた。この進歩は、言いかえれば、古代から近代への移行につれて、書く人間の視線が外から内へと向かったことと対応している。古代ローマの歴史家たちは、たしかにすばらしい著作を残した。しかし、とスタール夫人は続ける。「これらの歴史家たちは、いわば、生の外側しか描かない。それは、見られるままの人間であり、姿を現すままの人間なのだ。(…)古代の歴史には、精神の受ける印象についての哲学的分析も、性格に関する深

い観察も、魂の動きの目につかない徴候も、見出せない。モンテーニュの知的視線は、古代人のいかなる作家の視線よりも、遠くまで進んでゆく。」⁽⁴³⁾

スタール夫人は、文学に内面と感情が現れる様子を、作品の検討を通じて、対象化しながら論じている。しかし、問題の性質からしても、これは、純然たる認識行為にとどまっていはいないだろう。たとえば彼女は、文学作品が読む者におよぼす感覚的、肉体的な影響を、こんな強い言葉で表現する。「文学の傑作は、それが示している模範とは無関係に、肉体と精神に対する一種の衝撃と、讃嘆による震えを引きおこす。(…)雄弁、詩、劇的状况、愁いを誘う思想は、思索に向けられているが、また身体の諸器官にも働きかける。そうなる」と美徳は、抑えのきかない衝動となり、血中を流れる運動となつて、この上なく激しい情念のように、あなたを容赦なく行動へと駆りたてるのである。」⁽⁴⁴⁾このような現象は、文学のもつ力についての一般論として述べられているが、またそこに、スタール夫人の内部に生起する情動を感じないわけにはいかない。文学作品によって内面に喚起される感情を論じることは、自分自身の感情を分析することとも結びついていたはずである。

自己の内面で受ける強い反応は、スタール夫人にとって批評意識が動きはじめるとも契機でもあった。一七八八年に書かれた「ルソーの著作と性格についての書簡」の冒頭で、彼女は執筆の動機と方法の一端をこう説明している。「私は自分の讃嘆の念を、言葉に表現する必要を感じた。(…)私は、自分が感激した思い出と印象を心に

よみがえらせながら、いくらかの楽しみを味わった。」⁽⁴⁵⁾もちろん、『文学論』で扱われているすべての作品に、このような讃嘆の気持ちが生じるわけではない。むしろスタール夫人は、対象と距離を置いて眺めながら、作品の価値を測り、時代を歴史のなかに位置づけ、叙述に客観性をもたせようと腐心しているような印象すら受ける。

ところが『文学論』の「結論」では、それまで読み進めてきた印象を大きく裏切るような告白がなされている。「私には、思想と感情を区別することはできない。考察するようにわれわれをかき立てるのは、心の動きであり、それだけが精神に、素早く深い洞察力を与える。(…)人がある著作を好きになるのは、その著作が、われわれの気づかぬ間にわれわれを意のままにしてしまう苦しみや思い出に応えてくれるからである。(…)冷静な精神の持ち主たちは、彼らの関心をけつして引くことのないような、あの心の動き、あの愛惜の念、夢想がもたらすあの錯乱を書きくわえたりせず、理性による見解だけを示してほしいと望むだろう。私は彼らの批判は甘んじて受ける。実際のところ、私にどうやってそれを避けることができただろうか。」⁽⁴⁶⁾

この文章は、『文学論』が「ルソーの著作と性格についての書簡」で示されたのと同じ方法で書かれたことを示しているだろう。スタール夫人は文学を論じる上で、思想と感情を結びつけるという方法を意識的に選びとったのではない。右の引用文は、自分のなかで感情と思考が分かちがたく結びついており、両方を一体化したかたちでしか書けなかったという、ほかにどうしようもない批評意識の

ありようを打ちあけている。批評に感情を持ちこむのは、自我を肥大させ、独断による主張を申したることではない。ジョルジュ・プーレは、先に引用した「ルソーの著作と性格についての書簡」の一節を取っかかりにしてスタール夫人の批評の方法を探り、そこに「自分が強く感じる対象のなかに没頭する者のエゴイズムと、この感情にそなわっている、何よりも利他的であるという特殊な性質によって、自分の外へと突き動かされる者の無私の精神が、同時に存在する」と、鋭く指摘している。激しい讃嘆の念は、讃嘆する自我を消滅させるといって、逆説的な現象が起きているのである。文学の本質を把握し、表現するためには、これ以外の方法はないと、スタール夫人は直感していたはずである。

では、感情と一体化した思考とは、具体的にどのような働きをする現象なのだろうか。スタール夫人は、幸福な時期よりも不幸で苦しい時期の方が、思考はより活発になると考え、その動きをこう説明している。「魂が苦しんでいるとき、思考は増殖して希望を探しもとめ、懐かしむ対象を見つけ、過去を深く掘りさげて、未来を推察する。このような観察能力は、平穏で幸福なときにはたいい外的な事物に向けられるが、不幸に見舞われると、われわれ自身の印象に対してのみ発揮されるのである。」⁽⁴⁸⁾強靱な思考は、今、ここで目に見えるものだけを対象とするのではなく、内部へと向かい、過去と未来へと進む。希望を探し、未来を推察するのが精神の働きであるとすれば、懐かしむ対象を見つけ、過去を検討するのは感情の作用だといえるだろう。

優れた文学作品には、読む者がいなく、追憶や愛惜という過去に向けての感情と響きあう性質がある。しかしこのことは、読み手の受動的な経験であるだけではない。過去への思慕が人間にとって重要な感情であるならば、それは文学作品の大きな主題となるだろう。古代ローマの文学は、こう特徴づけられている。「当時の詩人たちが書いていたすべてのことに、愛惜の念と追憶が感じとれるように思われる。おそらくはそのために、彼らはギリシア人たちよりも多く、われわれの魂に強い印象を呼びおこすのである。ギリシア人たちは未来を向いて生きていたが、ローマ人たちはすでに、われわれと同じく、視線を過去へと向けるのを好んでいた。⁽⁴⁹⁾」作家が過去へと目を向けることが、読み手に同じ感情を促す。このような文学の方法は、古代ローマ以来とだえることはない。

追憶あるいは愛惜という感情は、何かに強制されて生じるのではなく、自然にわきあがるものである。スタール夫人にとって過去への意識がもつ最も重要な意味は、この点にあるように思われる。だとするならば、個人の経験としての過去だけではなく、文学の過去と現在についても、同じことがいえるだろう。今生きている人間にとって、どのような文学が最も必要なのか。アンシアン・レジーム期の気取った作品は問題外である。古典文学は、研究の対象としては有益だが、そこから得られる知識は、読む者が普段いだいている印象や感情と大きく喰い違っている。『文学論』での古代文学と近代文学の対比、あるいは南方文学と北方文学の対比は、『ドイツ論』で、古典主義とロマン主義の対比に置きかえられる。スタール夫人

は後者を選択する。しかしそれは、ロマン主義が、新しい文学であるゆえに価値があるのではない。現在と過去が結びつく強さの問題なのである。古代人の文学は、外から移植されたものである。したがって、現代の作家が古代文学を模倣しようとするれば、「自分の本性ナチュールを探り、追憶をたどることができない」⁽⁵⁰⁾まま、厳密な規則に従うほかはない。それに対してロマン主義の文学は、「われわれ自身の土地に根ざし」ており、「われわれの宗教を表現し、われわれの歴史を思い起こさせる。その起源は古いが、古代的ではない。⁽⁵¹⁾」ロマン主義文学とは、ドイツ的な文学ではあっても、この意味でスタール夫人にとっては内なる文学であり、親しい過去の継続であった。フランス革命という事件は、内部に喚起されるべきこのような過去の印象を、叩き壊してしまったのである。

注

- (1) ペアトリス・ディディエ、『フランス革命の文学』、小西嘉幸訳、白水社、一九九一年、五〇六ページ。
- (2) Gustave Lanson, *Histoire de la littérature française*, 1894. Michel Delon, «La Révolution et le passage des belles-lettres à la littérature», *Revue d'histoire littéraire de France*, 1990, n° 4-5, p. 574-4の引用した。
- (3) *De l'influence des passions*, Rivages poche, 2000, p. 104.
- (4) *De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales*, nouvelle édition critique établie, présentée et annotée par Axel Blaesche, Classiques Garnier, 1998, p. 2, 15, 17の作品からの引用は、以下、ページ数のみを記す。
- (5) p. 2.
- (6) p. 15.

- (7) Roland Mortier, 《Madame de Staël et l'héritage des Lumières》, *Chartés et ombres du siècle des Lumières*, Droz, 1969, p. 125.
- (8) Sainte-Beuve, 《Madame de Staël》, *Portraits de femmes*, Gallimard, Folio, 1998, p. 126. 藤原書店。
- (9) Jean-Claude Barrère, *L'idée de goût de Pascal à Valéry*, Klincksieck, 1972, p. 109.
- (10) p. 40-41.
- (11) 十八世紀後半のフランスの啓蒙思想の語の使用について Madame de Staël, *De la littérature*... op. cit., p. 430-431, note 30; Jochen Schlobach, article 《progrès》, *Dictionnaire européen des Lumières*, Presses universitaires de France, 1997, p. 908-909. 岩波文庫。
- (12) p. 45.
- (13) p. 16.
- (14) p. 40.
- (15) cf. p. 77.
- (16) p. 129.
- (17) p. 8.
- (18) p. 46.
- (19) p. 314. *スタエール* は例外的なフランス人。cf., p. 94.
- (20) p. 172.
- (21) p. 353-4.
- (22) *De l'Allemagne*, GF-Flammarion, 1968, t. II, p. 174.
- (23) フォンデルセ他『フランス革命期の公教育論』阪上孝編訳、岩波文庫、二〇〇二年、三八ページ。
- (24) p. 287.
- (25) *Dix années d'exil*, Fayard, 1996, p. 104.
- (26) *Considération sur la Révolution française*, Tallandier, 2000, p. 70.
- (27) p. 289.
- (28) p. 288-9.
- (29) p. 328.
- (30) p. 310.
- (31) p. 264.
- (32) p. 273.
- (33) p. 28.
- (34) p. 29.
- (35) p. 271-2.
- (36) p. 354.
- (37) p. 70.
- (38) p. 355.
- (39) p. 8.
- (40) p. 129.
- (41) ショール・プレシエール『ロスモポリタンの想像力』『文学生産の哲学』小倉孝誠訳、藤原書店、一九九四年、五十二ページ。
- (42) *Corinne ou l'Italie*, Gallimard, Folio, 1985, p. 176-7.
- (43) p. 118.
- (44) p. 19.
- (45) 《Lettres sur les ouvrages et le caractère de J.-J. Rousseau》, *Oeuvres de jeunesse*, Desjonquères, 1997, p. 35.
- (46) p. 421-2.
- (47) Georges Poulet, 《Madame de Staël》, *La conscience critique*, José Corti, 1971, p. 16.
- (48) p. 349-50.
- (49) p. 113-4.
- (50) *De l'Allemagne*, t. 1, p. 213.
- (51) *Ibid.*, p. 214.